ニューズレター
第13号
2022年7月15日発行

（公財）日本テニス協会
テニスミュージアム委員会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 7階
Tel.03-6812-9271

# コロナ禍で募るミュージアム具現化への意欲

テニスミュージアム委員長
吉井　栄

2020年１月20日（月）に横浜港を出港したダイヤモンド・プリンセス号は、２月３日（月）に横浜港沖に帰港した。今思えば、船内で得体の知れない感染症が見つかり、連日ニュースを賑わせ出したときには、すでに世界中でその正体不明の病原体との闘いが始まっていたのだ。横浜港に停泊するクルーズ船内だけの問題ではないことが明らかになり、重症者数そして死者数が毎日報告されるようになった。医療機関が逼迫し、医療従事者にのしかかる重責を目の当たりにしながら、有名芸人や女優が次々と亡くなり、海外からも同じウイルスの猛威についてさまざまな知らせが届いた。この前代未聞のできごとに全地球が息を潜めていた。「コロナ禍」の始まりだった。

2020年といえば待ちに待った東京オリンピックの年。本来ならば日本国中が４年に一度のスポーツの祭典に盛り上がっているはずだったが、全世界を巻き込んだ見えない敵になすすべもなく、延期となり、翌年の2021年に無観客開催と、異例中の異例の展開となった。有明テニスの森の会場には新しいショーコートができ、仮設スタンドも準備され、最新のインドアコートもできた。開催が決まったときは、日本の湿度の高さゆえの熱中症の懸念ばかりが取り沙汰されていたが、いざ開催となると大会関係者はマスク着用が必須となり、入場のたびに検温と消毒、数日ごとにPCR検査を受け、毎日の健康状態を報告しなければならず、空っぽのスタジアムコートでやたら響くボールの音に戸惑わずにはいられなかった。A.ズベレフ（ドイツ）とB.ベンチッチ（スイス）が金メダルを獲得したが、ホームコートアドバンテージとはほぼ無縁の中で、日本のテニス選手は次々と敗退、どう見ても盛り上がりに欠けた五輪テニスとなった。感染防止対策の一環として、ラインジャッジなしで、ボールパーソンも手袋をしたままボールを渡し、選手たちにポイント間にタオルを渡すこともしなかった。国内の大会は全て中止となり、海外の多くの大会も同じだった。

JTA設立のきっかけとなった
1921年デ杯の大会プログラム

引退の時期が迫っているであろうベテラン選手たちの有終の美を飾るべく大会が行われない、オリンピックやパラリンピックで母国を代表しての熱い戦いも静けさの中で行われる、そんな中で選手たちは一体何を考え、何を思いこの時間を過ごしているのだろうか‥‥。そんなことを思い巡らさずにいられなかった。

予想以上に長引くコロナとの戦い、新星のごとく現れ、一挙にグランドスラムタイトルを４つ獲得した大坂なおみ選手が精神的な問題を抱えていると公表し、スポーツ選手のメンタルヘルスの問題が表面化した。そして 、2022年に入り、女子世界ランキング１位のアシュリー・バーティ（オーストラリア）が突然引退を表明した。N.ジョコビッチ（セルビヤ）のコロナ・ワクチン接種拒否は、テニス界に難しい判断を突きつけ、個人の自由と公民の安全との狭間にスポーツ界さえもが追い込まれた。

一方で、C.アルカラス（スペイン）という名の若者がその強靭な体からくり出す超高速ショットで人々を驚かせ、なんとも器用なプレーをするJ.シナー（イタリア）、やる気満々のH.ルーネ（デンマーク）が活躍すれば、女子では、ココ・ガウフ（アメリカ）が18歳という若さで頭角をあらわし、I.シフィオンテック（ポーランド）が1位の座につき次世代の到来を印象付けた。

女子日本代表選手達がトルコのアンタルヤで行われた2022年度ビリー・ジーン・キング・カップ（BJK杯）アジア／オセアニア・グループ１部を１位で通過し、11月のプレーオフに進出した。その偉業に大きく貢献した柴原瑛菜がローランギャロスで全仏混合ダブルスの覇者となった。

コロナとの闘いが続く中、ロシアがウクライナに侵攻し、世界平和が揺らいだ。SNSの時代、あまりにも残酷な映像がリアルタイムで世界中に報道され、スポーツ界も行動に出ざるを得ない。ITF（国際テニス連盟）もロシアとベラルーシが国別対抗戦に出ることの禁止を決定し、個人で参加する選手はあくまでも個人での出場ということになったが、LTA（英国庭球協会）とウィンブルドンは今年のウィンブルドンにロシアとベラルーシの選手が出場することを禁止し、スポーツと政治のあり方及び戦争という現実の中で多くのことが問われることになった。

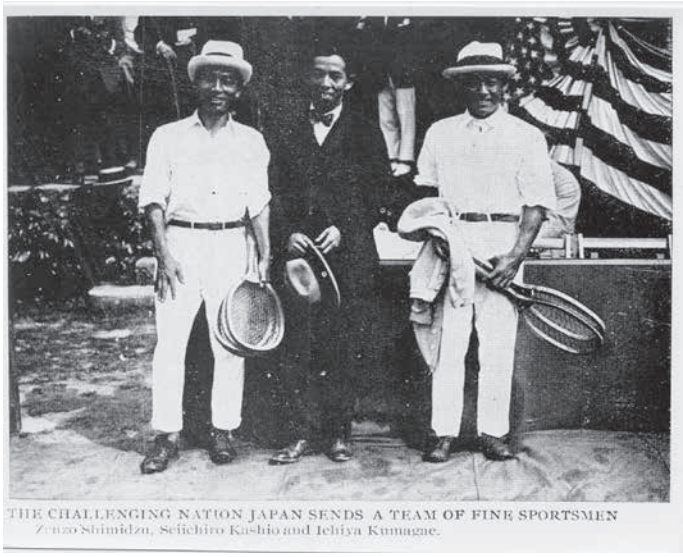
コロナというウイルス、そしてロシアのウクライナ侵攻、そんな時代をもテニス界は総力で生き延びようとしている。これも歴史の1ページなのだろう。テニスというスポーツは、これまでも世界情勢に巻き込まれながら、対応し、変化し、スポーツとして生き延びてきたのだ。PCR検査を受けながら、ワクチンの接種をしながら、マスクをし、手を消毒し、コロナ禍に翻弄されながらも、工夫を重ね、耐えた日々。戦争や、自然災害、差別を乗り越えたテニスがまたひとつの試練を乗り越えようとしている。今、我々が設立に向けて動いているテニスミュージアムの一角に、語り継がれるであろうテニス界の1ページ、「試練のときである」ことには間違いない。

日本テニス協会（JTA）は1922年３月11日（土）に、デビスカップ参加資格を得るために設立された。来年はコロナ禍のために延期された協会設立100周年記念式典を開催するにあたり、日本テニスの歴史を多くの方々に知ってもらうためにJTAテニスミュージアム設立の具現化に一層の意欲を感じている。

私の宝物② 日本テニス協会年史

# 年史制作とミュージアム実現への思い

テニスミュージアム委員
元日本テニス協会事務局長
清水 伸一




1921年デ杯チーム。左から清水善造、柏尾誠一郎、熊谷一弥

1922（大正11）年に設立され、昨年、2021年に100周年を迎えた日本テニス協会の歴史は偉大な選手たちの活躍からスタートしました。きっかけをつくったのは、熊谷一弥、柏尾誠一郎、清水善造の3選手です。

熊谷選手が1919（大正8）年に全米ランキング3位となり、翌年のアントワープオリンピックで銀メダルを獲得。柏尾選手と組んだダブルスでも準優勝し、2つの銀メダルを獲得しました。同じ1920（大正9）年、清水善造選手はウィンブルドンに日本人として初参加して、オールカマー決勝（前年優勝者への挑戦者を決める制度で現在の準決勝に相当）まで進出しました。こうした日本選手の活躍を見て米国テニス協会から誘いがあり、日本は1921（大正10）年に初めてデビスカップに参加することになったのです。このとき、前述の3選手で挑んだ日本チームは、フィリピン、ベルギーの棄権で2勝を拾った後、インドを5－0、強豪オーストラリアを4－1で破り、米国ゾーンで優勝。王座保持国の米国には0－5で敗れたものの、いきなりのチャレンジラウンド進出は世界を驚嘆させたのでした。

しかし、当時の日本には全国レベルで統括するテニス競技団体はなく、デビスカップなどの国際大会に継続して参加するためには、国を代表する窓口を設立する必要に迫られました。そこで、1921（大正10）年に形式的に協会がつくられ、翌1922（大正11）年の3月11日、日本庭球協会が正式に発足したのです。初代会長は朝吹常吉氏で、当初、協会財政の基金となったのはデ杯戦入場料分配金など約2万1000ドル（当時は1ドル＝2円）だったそうです。協会創立とともに、この年から全日本選手権がまず男子で始まり、初代優勝者の栄冠を獲得したのは、のちに渡米し、日本にイースタングリップを紹介した福田雅之助選手でした。

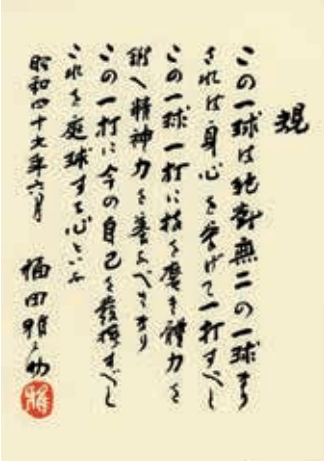
このように、日本テニスの今日までの歴史は、選手の活躍に後押しされる形でスタートし、その後も幾多の選手の活躍に支えられると共に、全国各地の多くの関係者のご努力によって、普及振興、発展してきたわけです。その活動の様子をより多くの人々に周知するために、テニス協会では歴史の節目に年史を発行してきました。1932（昭和7）年に『10年史』、そして1983（昭和58）年に『60年史』を、以後10年ごとに発刊することで歴史は継承され、史料は協会の活動に大変役立てられました。10年ごとの活動内容、大会記録などを整理して年史に残すことが、いかに大変かつ重要なことであるか、私は協会スタッフとしてその作業に携わり深く理解しているつもりです。

テニスミュージアム委員会では、わが国のテニス文化を後世に残すために、テニス関係の史料（文献、雑誌、写真、フイルム、記録、用具など）を収集、保管、保存、整理することを日々欠かせない大事な仕事として取り組んでいます。収集した史料の保管は、当初、協会事務所内ではスペースが足りず、田園クラブ、トピレッククラブ、荏原湘南スポーツセンター、朝日生命久我山スポーツセンター、VIPインドアクラブ、ハタスポーツプラザ、有明コロシアムなどのご協力を賜り、移動させながら保管してきました。現在は新木場の倉庫にまとめて保管・管理しておりますが、現在の管理場所では委員が史料を整理するスペースもわずかで、また史料保管・保存のための設備が十分に整っているわけではありません。貴重な史料の劣化も心配されますので、早い段階で保存・保管に適した場所を確保するべく活動しています。

また、テニスミュージアム委員会で取り組んできた史料のデータベース化については、近い将来、一般の皆様にもご利用いただけるよう準備を進めております。これまで多くの方々からご寄贈いただきました史料、そして長年にわたる収蔵の史料は、日本テニス界の有形、無形の財産として、後世に伝え、更なる普及、振興のために活用願えればと思います。日本テニスミュージアム設立の夢を叶えるために、故・宮城黎子さんのご遺志を継承し、多くの方々にご理解を戴き、ご支援、ご協力を賜りたいと存じます。

第１回全日本選手権大会に優勝しニューヨークカップを拝受した福田雅之助

日本選手の国際的活躍を記念して、1922年にニューヨークの日本クラブ有志からJTA に贈られたニューヨークカップ



規

この一球は絶対無二の一球なり
されば身心を傾けて一打すべし
この一球一打に技を磨き精力を
尽くし精神力を養うべきなり
この一打に今の自己を表現すべし
これを庭球する心とす
昭和四十七年六月　福田雅之助

福田雅之助が記した「規（この一球）」の全文

テニス歴史散歩②

# 横浜山手テニス発祥記念館

テニスミュージアム副委員長
中川 智文

## 記念館設立までの経緯

アイスクリームやナポリタン、ガス塔や競馬場など、横浜発祥の食べ物や施設は多いけれど、テニスもその一つ。1878（明治11）年に、現在の横浜市中区山手町、港を見下ろす高台にある公園（日本初の西洋式公園）の中に、居留地外国人女性によって「レディーズ・ローンテニス＆クロッケークラブ（LLT & CC）」が誕生した。イギリスで競技スポーツとしてのローンテニスが始まったのが1874（明治7）年というから、遅れることわずか4年でテニスは日本に上陸したことになる。

当時のテニスは、芝の庭に組み立て式のネットを立て、女性はバッスルスタイルと呼ばれる散歩用ドレスをまとって、合間にお茶をいただきながらたしなむものだったとか。男性が開国当初の日本で忙しく活動する中で、母国を懐かしむ女性たちが社交場としてつくったのがテニスクラブだったようだ。

LLT & CCは1964（昭和39）年、東京オリンピック開催の年に「横浜インターナショナル・テニスクラブ」に改称され、日本人会員も初加入。その後、1982（昭和57）年に同クラブは「社団法人横浜インターナショナル・テニスコミュニティ（YITC）」となり、現在も日本最古のプライベートテニスクラブとして存続している。そして、YITC創立120周年を迎えた1998（平成8）年に、「横浜山手テニス発祥記念館」が開設された。

## 日本唯一の貴重品も展示

「横浜山手テニス発祥記念館」は、YITCメンバーで『テニス明治誌』（1980年、中公新書）の著者でもある政治学者の故・鳴海正泰氏（関東学院大学名誉教授、横浜山手テニス発祥記念館初代館長）の提案を受けて横浜市が設立・運営。同じ敷地内に移築された「旧山手68番館」と同じ雰囲気のしゃれた洋館に、鳴海氏の収蔵品を中心に、YITCから寄贈された貴重なテニス用品や解説パネルが展示されている。

展示品の中でも特に貴重なのは約500年前の「テニス以前の革手袋」。テニスの前身とされるジュ・ド・ポーム（フランス語で手のひらの競技）用グローブで、日本では唯一のものだという。LLT & CCで実際に使用された、1874年にロンドンで発売された「テニスボックス」も珍しい。ラケットとボール、ネットに支柱や木槌など、これさえあれば庭でテニスができる道具一式が詰められた木箱だ。ローンテニスが庭球と邦訳されたのは、この「テニスボックス」を使ったプレーが由来という説もある。そのほか、古い木製ラケットや、1870年代以降のテニスボール、テニスの歴史を解説するパネルなど興味深い展示品がきれいに並んでいる。

【横浜山手テニス発祥記念館】神奈川県横浜市中区山手町230
山手公園内／9時30分～17時／休館日は毎月第3月曜日（休日の場合は翌日）、年末年始（12月29日～1月3日）／Tel & Fax：045-681-8646

## テニスファン必見の横浜観光スポット

「横浜山手テニス発祥記念館」は、JR根岸線「石川町」もしくは「山手」駅、みなとみらい線「元町・中華街」駅から徒歩15分。かなり急な坂道や階段を上ることになるが、周囲に観光スポットが点在しているので、横浜散策のプランを立て、徒歩もしくはバスを利用してのんびり訪れていただくのがおすすめ。山手公園内には6面の公営テニスコートがあり、予約システムへの登録や高倍率突破の壁はあるが、原則誰でもプレーすることは可能。山手公園テニスコートでプレーをして、記念館を見学というスペシャルコースに挑戦してみるのもいいかもしれない。

テニス発祥の地に建立された石碑

左が「テニス以前の革手袋」、右は打面まで竹製のラケット

テニスボール展示コーナーにはボールを再生させる「毛羽立て器」も

1900年頃に人気だったというスラセンジャー製デーモン印のフィッシュテール型ラケット

ローンテニス発祥当初に使われていたイギリス製の「テニスボックス」

日本で最初のテニスコート、YITCのNo1コート。当初はローンコートだった

山手公園クラブハウスとして使用されている旧山手68番館と市営オムニコート

書籍紹介

# 昭和のテニス侍 Atsushi Miyagi's Life Story

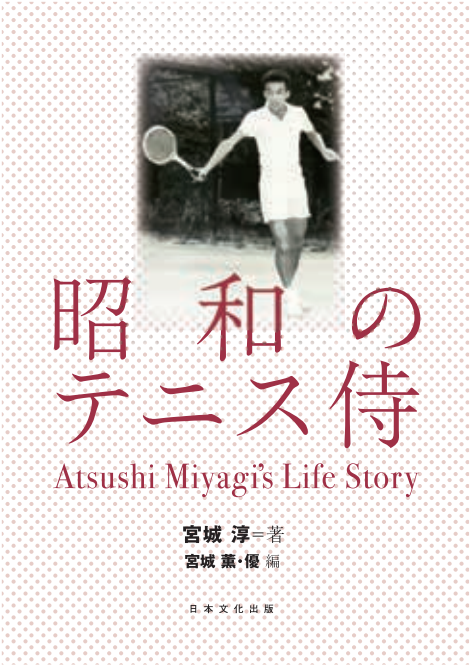
2021年２月24日に亡くなられた故・宮城淳さんの自伝的書籍が発行されます。この本は、自分史出版に向けて執筆中だった同氏の遺稿を、ご遺族と、姉の宮城黎子さんが編集長、淳氏が編集顧問を務めたテニス専門誌のスタッフが再編集し、多くの知人から寄せられた「宮城淳さんの思い出」をまとめたものです。

学生時代から日記をつけ続けていたという宮城氏が、自ら書き残したテニス人生の記録は詳細で、歴史的にも価値のある写真もふんだんに掲載されています。

家族でテニスをして遊んだのは小学３年生のころのあいまいな記憶で、中学からは野球に没頭したこと。第二次世界大戦前後の東京で生活する中学生の日常生活。早稲田大学入学後、あまり練習に参加できない理工系学生の入部が認められなかった野球部をあきらめ、入会金を払えば入部させてもらえるという庭球部に友人と一緒に入った話。その後、才能を発揮して世界的プレーヤーになるまでの紆余曲折。全米ダブルス優勝は、記録的大雨による大会の延期が大きく影響したというエピソード。後に妻となる操さんとの馴れ初め。デビスカップを戦う中での喜びや苦悩など。「この一球は絶対無二の一球なり」の福田雅之助氏をはじめ、歴史的人物とのふれあいを交えたリアルな文章は昭和の日本テニス史そのものといってもいいものでしょう。

残念ながら、ご自身が書き残した原稿は現役プレーヤーを退くまで。その後の半生は、娘である薫さんと優さん、そして坂井利郎さん、渡邊康二さん、ケン・ローズウォールさん、土橋登志久さん、松岡修造さんなど50名の方から寄せられた「宮城淳さんとの思い出」をつなげることでまとめられています。元プロテニスプレーヤーで、現在は画家として活躍されている高津奈巳さんの挿絵も、この特別な本に華を添えています。

本書は、2022年10月21日に東京都内で開催される予定の『宮城淳の人生を祝う会』参加者への記念品として限定出版されるものですが、事前発注を基本に、一般の方からの注文も受付可能とのことです。




**発行予定日**：二〇二二年十月二十日
**価格**：五〇〇〇円（税込）
**予約申し込み・問い合わせ**：
・日本文化出版オンラインショップ（https://shop.nbp.ne.jp/）
・日本文化出版（販売部）☎〇三－三三六五－七三七三

## 令和3年度『特定寄附金テニスミュージアム』会計報告

令和３年4月1日～令和４年3月31日

| | |
|---|---|
| 令和３年度寄附金額（令和4.3.31まで） | 3,776,600円 |
| WEB史資料システムへのデータ移行費用支出 | 495,000円 |
| 令和３年度末基金残高 | 41,170,487円 |

## 令和３年度テニスミュージアム委員会活動報告

■主な活動
新WEBデータシステム導入・史資料データ移行
JTA公式HPに「消えたオリンピックメダル」記事掲載
史資料寄贈受け入れ
所蔵する史資料への問い合わせ・貸出対応
JTA100周年事業への協力
常設ミュージアムの検討
ニューズレター製作発行
月例委員会をリモート会議で開催

## 〈掲示板〉

**（公財）日本テニス協会特定寄附金「テニスミュージアムに関わる寄附」へのご寄附のお願い**

**［ご寄附の方法］**
①ネット決済の場合：JTAホームページ（https://www.jta-tennis.or.jp/）の「寄附」コーナーより、「寄附の方法」のインターネットからのお申込みはこちらボタンをクリックしてお手続き下さい（https://fundexapp.jp/jta-tennis/entry.php）。
②振込の場合：同封の振込用紙をご利用いただくか、日本テニス協会（Tel.03-6812-9271）まで振込用紙をご請求下さい。同封・請求の振込用紙をご利用いただきますと、郵便局・ゆうちょ銀行、三菱UFJ銀行からは振込手数料が無料です。

**［頒布物のご案内］**
デ杯「甦る田園コロシアムの熱戦」DVD、フェド杯「日本女子テニス栄光への道のり～フェデレーションカップの時代～」DVD、「全日本テニス選手権90年の軌跡」DVDをご希望の方は、下記ミュージアム委員会までお問い合わせ下さい。テニス絵葉書（3種類）はJTAホームページの「JTA STORE出版物頒布」もしくは「情報」コーナーの「出版物」よりお求めいただけます。

**［資料・情報ご提供のお願い］**
テニス史資料の情報、住所・姓名の変更などはＪＴＡテニスミュージアム委員会までメールにてお知らせ下さい。（Eメールアドレス：museum@jta-tennis.or.jp）

＊JTA テニスミュージアムの活動にご賛同いただいた方々の一覧は、JTA 公式ホームページの「寄附」の「芳名録」に記載させていただきました

■テニスミュージアム委員会■
委 員 長：吉井　栄　副委員長：中川智文
常任委員：武内　勝、後藤光将、小林やよい、越智和夫、西澤太郎、清水伸一
委　　員：我孫子和夫、小沢　剛、塚越　亘、渡邊康二、金森　悟、福池　泉、板橋 C.マリオ